Ⅳ　生活　３年次の成果と課題

１　成果

(1)　気付きの質を高める,「見方・考え方」を生かした対象への働きかけ方を「選択・決定」できる場の設定

児童が自分の思いや願いの実現に向けて対象に働きかけができるように，身体の五感を意識したり，比較や予測，試行をしたりするなど,「見方・考え方」を生かした対象への働きかけ方を「選択・決定」できる場を設定したことで，児童の気付きが多様化し，その質が高まっていく姿が見られたことが成果である。

生活科の「見方・考え方」を示し，それを生かすことで気付きを得られるようにするための単元構成を行った。対象の観察では，目を使えば大きさや形が，手を使えば感触が分かるというように,「見方」を生かすことで得られる気付きを引き出し共有することで，児童の気付きは偶然ではなく必然的に得られるものとなり多様化していった。また,「考え方」の生かし方を確認することで，違いや特徴を捉えるために比較したり，改善の方向性，見通しをもって働きかけを考えるために試行をしたりするなど，思いや願いを叶えるために目的意識をもって働きかけを行い,気付きの質を高める姿を引き出すことができた。

(2)　客観的視点をもつ他者との交流による学びのフィードバック

児童が自身の学びを自分で省察するだけでなく,「見方・考え方」を生かして対象に働きかけている姿を他者に観察してもらい，それを自身にフィードバックできる交流の場を設定したことで，自身の学びを客観的に把握し，無自覚だった気付きを自覚する姿へつながったことが成果である。また，他者にとっては学習モデルを観察することで,「見方・考え方」の生かし方を学ぶ場となったことも成果として挙げられる。

自身の客観的把握が必要な省察への第一歩となるよう，自身を客観視できるように，抽出児を教師や他の児童が観察し，そこで得た気付きを交流する場を設けた。抽出児を観察する中で，その児童の対象へ働きかける姿やそれに付随する対象の様子に関する気付きが自然発生的に生まれて共有された。このことにより，無意識下にあった，観察の仕方，遊び方，世話の仕方などの働きかけ方や「〇〇（働きかけ）したら△△（様子）になった」のような対象の様子が意識化されることになり，自分が対象に働きかける際に生かしている「見方・考え方」や，目の前の事象を捉えて気付きが生まれている自分を自覚する姿につながった。また，観察だけでは児童の気付きは対象の様子に偏りがちだが，栽培単元では，対象を擬人化し，それになりきって自分を見つめるという活動を設定したことで,「〇〇してくれたから△△になれた」というように，自身の働きかけにも目を向け自覚していく姿を引き出すことができた。

２　課題　対象への働きかけに見通しをもつための現状把握の場の充実

児童は自分の活動に比較的早い段階で満足し，自分の思いや願いの実現に向けて，対象によりよく働きかけようという意識に高まりが見られなかった。思いや願いの実現に対して現状はどうなのか把握し，そこからどのような働きかけを行うと自分の思いや願いが叶うのか考える力を高めることが課題である。

どの児童にも思いや願いはあり，活動に没頭している。しかし，活動途中で目指す姿への意識が薄れてそのときやりたいことを思いつくままに活動したり，現状に「このままでよいのか」と疑念をもたずに現状維持のまま活動したりする児童は少なくない。その都度，目指す姿と現状を比較する場を設け，対象へのよりよい働きかけをしようとする意識付けの必要がある。また,「こうすればこうなる」という働きかけと対象の変化の関連付けの例示や，働きかけを試行できる場の設定をしながら，働きかけた先にある対象の変化を予測したり見通しをもつために試行したりする「見方・考え方」を生かす力を高める必要がある。

試行錯誤しながら思いや願いの実現に向かっていくことが，自律した学習者の姿だと考える。そのために，児童が思いや願いを叶えるために主体的に考え働きかけることに意欲をもって活動をしていくための手立てを講じていきたい。